This number
2022年度のクマ事情

撮影：稲垣亜希乃

★毎年度のニュースレター第１号で恒例の、日本全国のクマに関わる情報を整理してお伝えする「クマ事情特集」です。おととし2021年度は北海道の大都市で出没が大幅に増加し、大きな問題となりましたが、いわゆる大量出没と呼ばれる秋の出没は起こらず、各地区からは比較的穏やかな状況だったと報告が多くありました。本号でお伝えする、昨年度**2022年度**も全体的には比較的穏やかな年だったといえるでしょう。しかし、北海道や東北など、地域によっては市街地への出没が目立ってあったり、西日本のこれまで出没が多くなかった地域で近年の出没が増加傾向にあります。各地で人家や農地、その周辺での人身事故も発生しています。誘引物の除去や藪の刈払いなどの出没させないための対策や、出没時の体制整備や机上訓練の実施等、平時からの備えが必要かつ重要です。

（編集責任：小坂井 千夏）

全国の状況・・・・P５～７

環境省が発表している全国のクマ類の捕獲、出没、人身事故の情報（右側QRコード, 最終確認2023年5月16日）や農林水産省が発表する農業被害の状況について、近年のトレンドを整理しました。

JBNクマ保護管理推進委員長・小坂井 千夏（農研機構）

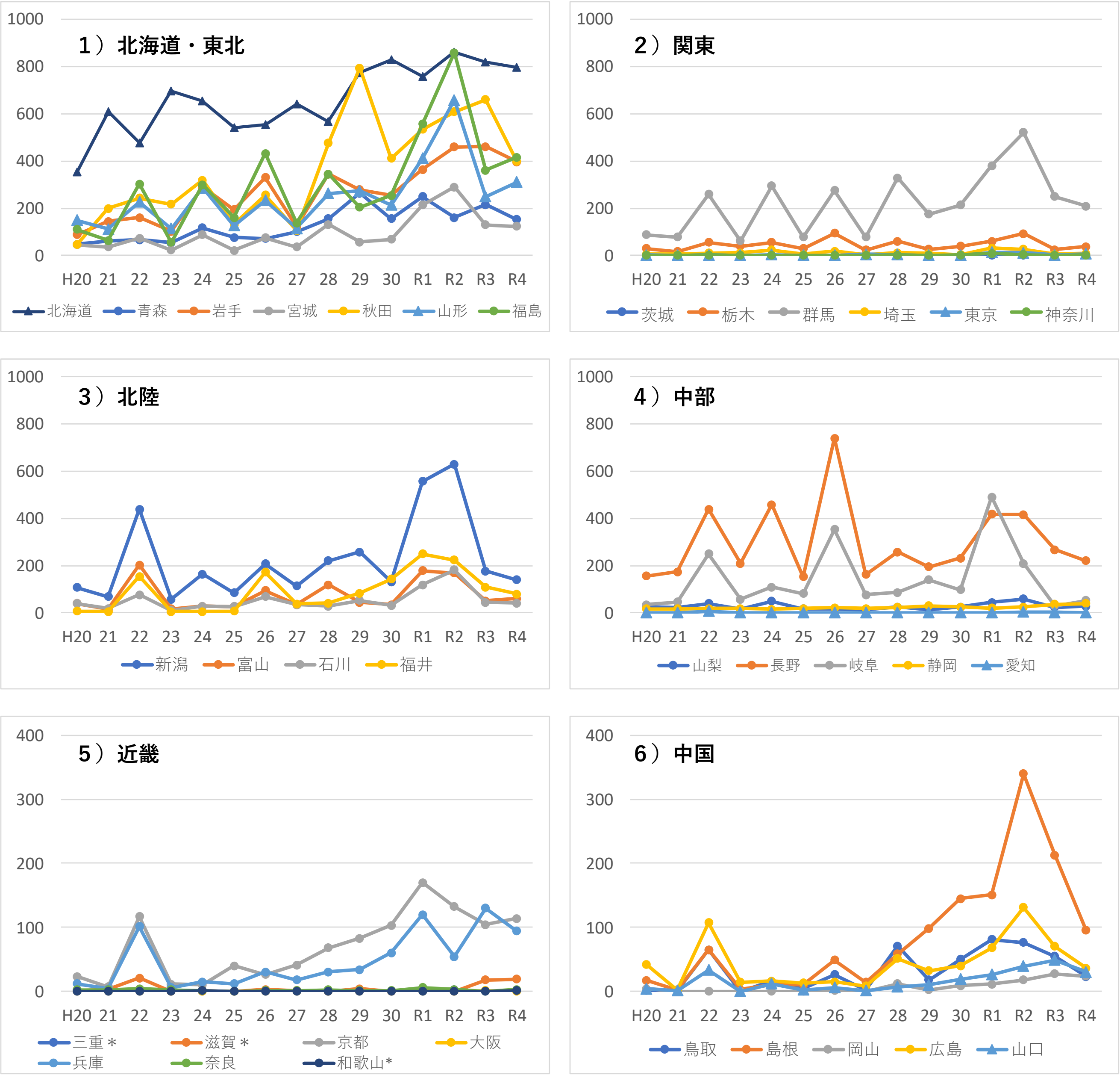


図１　平成20/2008～令和4/2022年度のクマ類の**捕獲数(頭)**

- 環境省webサイト（2023年5月16日付）の情報より。令和4/2022年度は2023年3月時点の速報値。
- 捕獲数は許可捕獲数（有害鳥獣捕獲と数の調整捕獲で、捕獲後に放獣された頭数も含めた合計値）
- 2022年度の捕獲数が「過去5年間の平均値×1.4」より多い都道府県名に＊印を付けた（この基準は「ツキノワグマの大量出没に関する調査報告書（自然環境研究センター2005）」と同一）

過去5年間に比べて、2022年度の捕獲数が多かったのは3県のみでした。
・三重県（1頭）
・滋賀県（19頭）
・和歌山県（1頭）

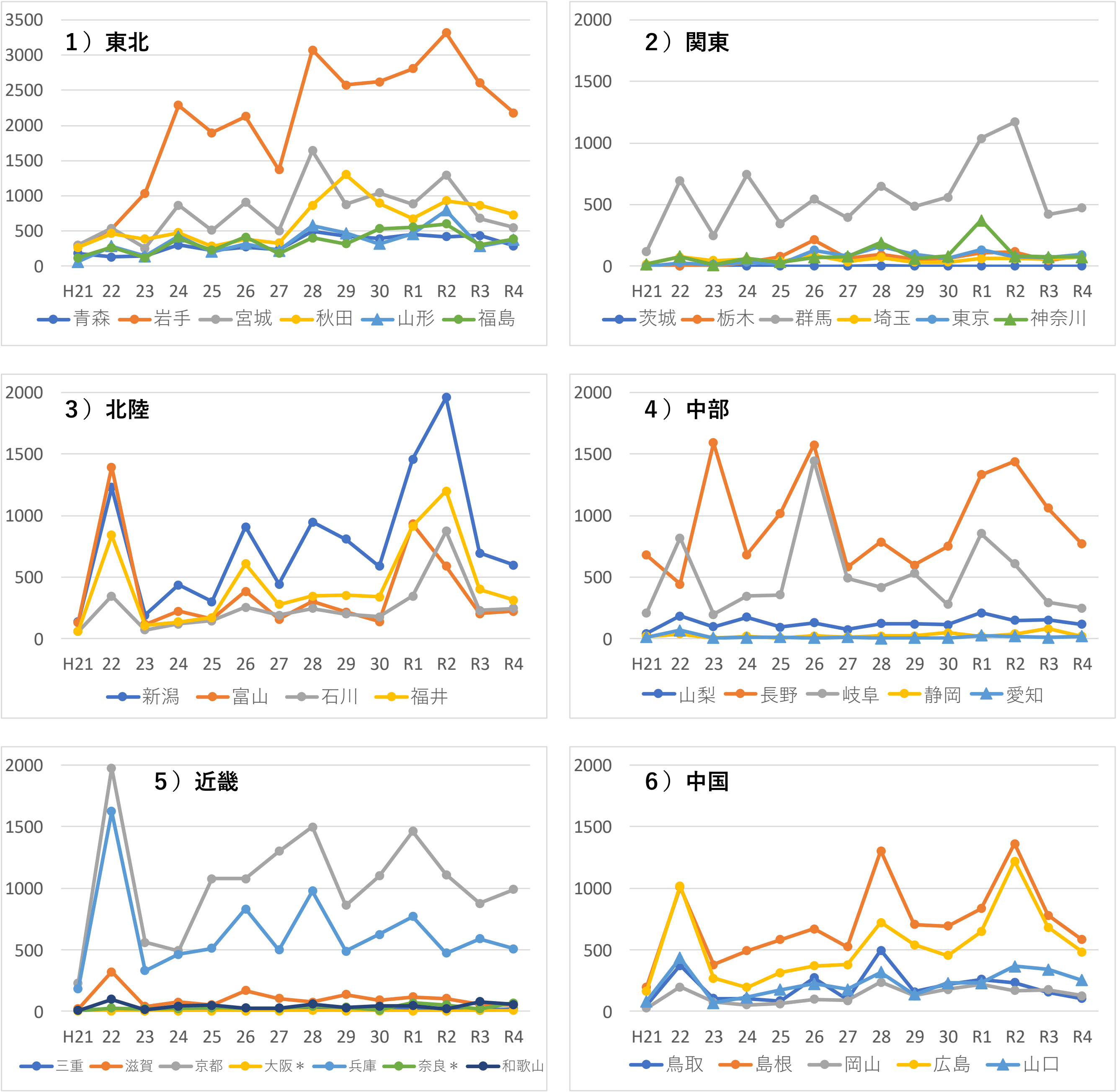


図2 平成21/2009～令和4/2022年度のツキノワグマの**出没情報数**

- 環境省webサイト（2023年5月16日付）より。
- 都道府県毎に異なる方法で集計（警察への通報件数、市町村からの情報等）。
- 長野県のデータについて。上記の環境省発表の情報ではH28年度までの値は「里地と山地」での目撃数、H29年度以降は「里地のみ」での目撃数となっている。本グラフはH28年度以前も「里地の目撃数」を、長野県のwebサイト（下部QRコード）から引用して使用した。
- 北海道は平成28/2016年度以降、道としての出没数の公表がない。

過去5年間に比べて2022年度の出没情報数が多かったのは2府県でした。
・大阪府（7件）
・奈良県（70件）

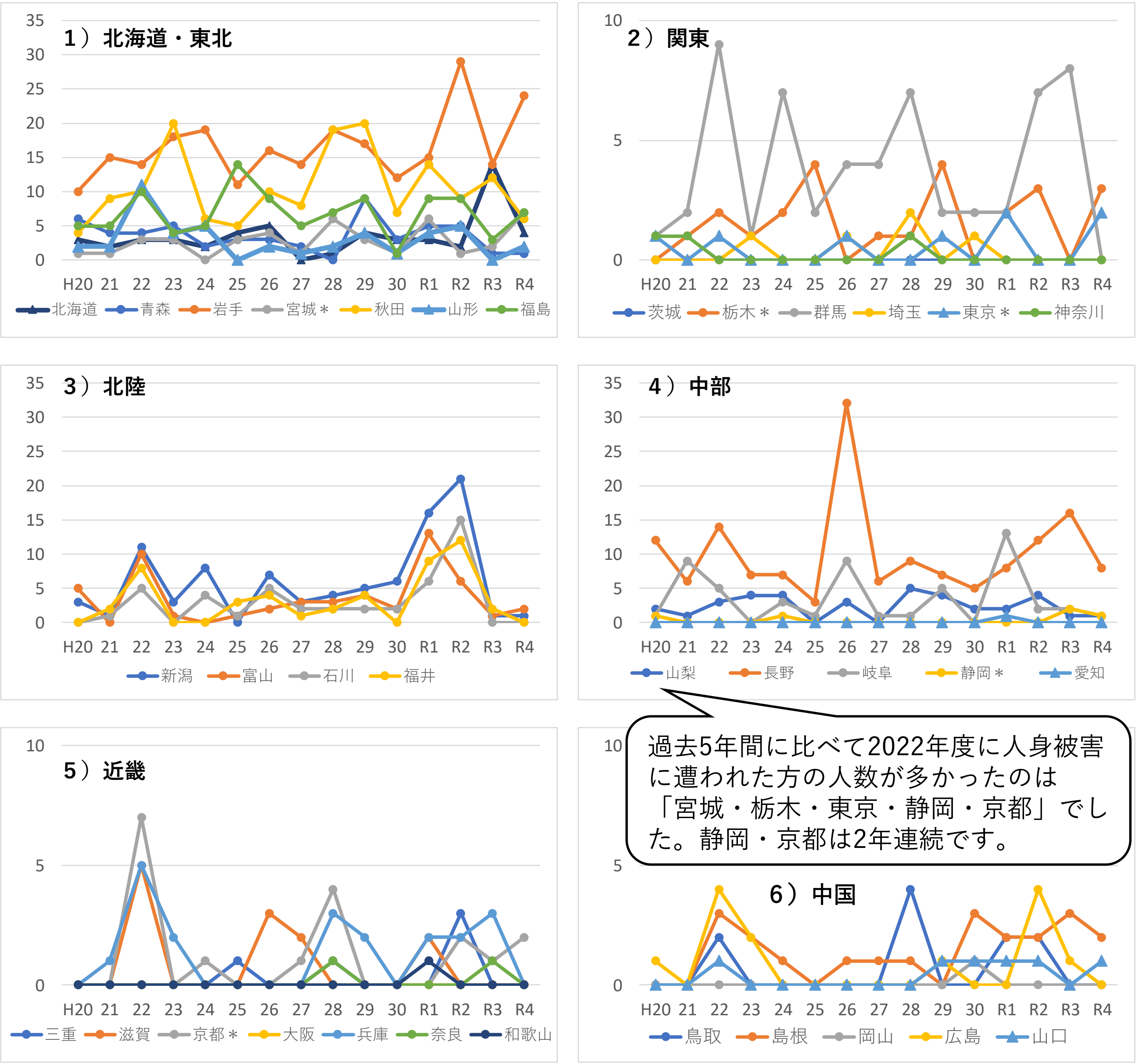


図 3 平成20/2008～令和4/2022年度のクマ類による**人身被害（人数）**

- 環境省webサイト（2023年5月16日付）より。

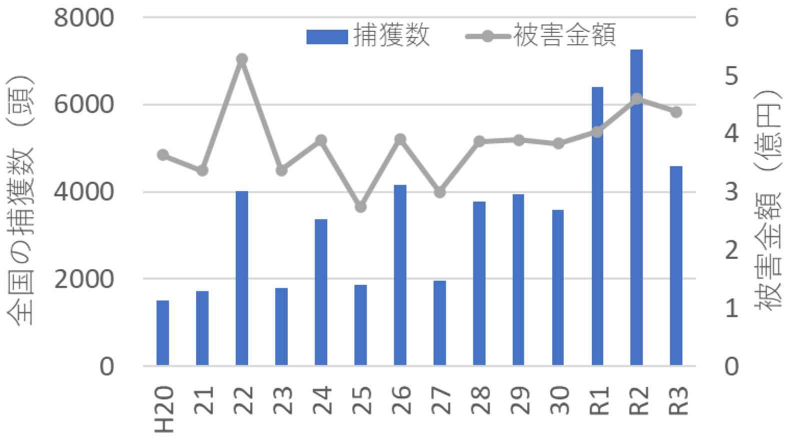


図 4 平成20/2008～令和3/2021年度のクマ類による**農作物被害額と捕獲数**

- 捕獲数は図１と同じデータ、農作物被害額は農林水産省発表のデータ（下部QRコード）を使用した。いずれもヒグマとツキノワグマの合計値。

各地区の状況

・・・・P８～18　各地区の代表地区委員からR4/2022年度の状況についてご報告いただきました。ご協力いただいた地区委員、関係機関の皆様、大変有難うございます。

北海道・・・・・P８　東北・・・・・・P９　関東・・・・・・P11
北陸・・・・・・P12　中部・・・・・・P14　近畿・・・・・・P15
中国・・・・・・P17　四国・・・・・・P18　九州からの報告事項はありませんでした

①出没の傾向、**②人身事故**の発生状況、**③捕獲数**の傾向、**④農作物被害**の発生状況
⑤堅果類の結実状況、**⑥出没対策**として取り組んでいることや良い事例等、
⑦その他特筆すべき状況、JBNとして取り組むべきと考えること
をまとめていただきました。一部地区では市街地での出没・事故の概況を「目立ってあった・ある程度あった・特に目立っていない・情報ない/不明」から選択していただきました。

北海道地区

釣賀 一二三（北海道立総合研究機構）、早稲田 宏一（NPO法人EnVision環境保全事務所）、山本 牧（NPO法人もりねっと北海道）、伊藤 哲治（酪農学園大学）、葛西 真輔（合同会社ワイルドライフプロ）

① 出没

▶札幌市における出没情報は162件と例年に比べてやや多めであった。2021年6月の東区市街地への出没事例、2022年3月の西区三角山での事故発生（後述）などを受けて、特にヒグマかどうかが断定できない「ヒグマらしき動物」の情報も多く発生した。▶一方、旭川市（上川北部地域）、占冠村及び知床半島地域（羅臼町・斜里町・標津町）においては、例年と大きな変化はみられなかったものの、市街地や市街地周辺における出没が多く見られた。出没する個体の傾向としては、春先から繁殖期（6-7月）にかけて若い単独個体や親子を含むメス成獣の活動が目立つ状況であった。

市街地での出没は？　全道的には各地で市街地への出没に関する報告が目立ってあった状況。市街地での人身事故はなかった。▶札幌市：目立ってあった。散発的ではあったものの、シーズンを通して市街地への出没が発生した。▶旭川市（上川北部）：ある程度あった。郊外の農業施設で人に追われた若いクマが、墓地や宅地、国道を横切り石狩川の河川敷に入ったが、人家密集地への侵入はなかった。▶占冠村：なかった。▶知床半島：目立ってあった。

② 人身事故

▶2021年度の事例となるが、2022年3月31日に札幌市の市街地に隣接する西区三角山において、市の委託を受けて冬眠穴を調査していた調査員2名がヒグマに襲われて負傷する案件が発生した。冬眠していたのは0歳2頭連れのメスで、この地域における繁殖個体の冬眠が確認されたのは初めてである。▶7月5日にはオホーツク管内北部の滝上町で、ハンターがヒグマの有害駆除中に手負いになった個体を追跡して襲われた事例が発生した。また、7月15日には渡島管内の松前町で、市街地に隣接した農地（家庭菜園）で農作業をしていた女性が襲われた事例が発生した。後者は、昨年同様の事故（農作業中）が発生した地点から9kmほどの場所で発生しており同一個体によることも疑われたが、現地調査で採取した体毛の遺伝子分析の結果、別個体によるものであることが明らかになっている。

③ 捕獲

▶北海道では2017年度以降800頭を超えるヒグマの捕獲が続いており、昨年度（2021年度）は過去最多の1,056頭が捕獲された。各地域からは、捕獲数が例年並み～やや増加であることが報告されており、2022年度についても高い水準の捕獲が継続していると考えられる。▶捕獲数の増加には後述のデントコーン作付けの増加も影響していると考えられ、占冠村では、村が実施する許可捕獲（10頭）のすべてがデントコーン被害防止目的であった。

④ 農作物等の被害

札幌市では南区の果樹園で被害が発生したが、市の担当部局による電

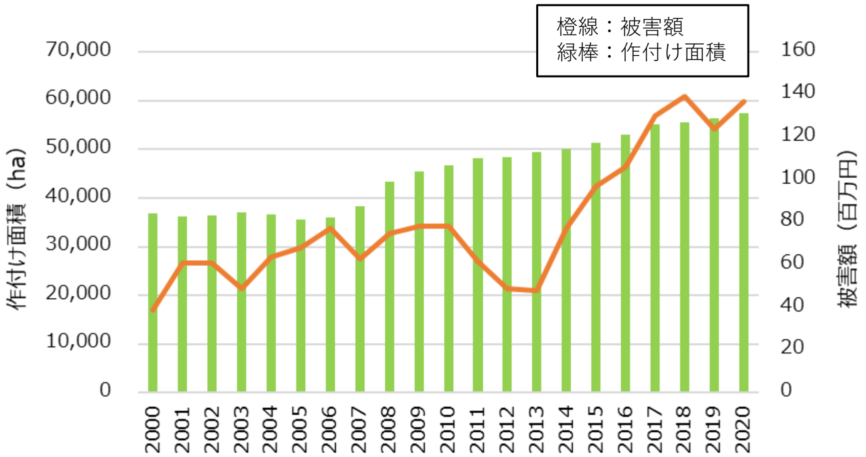


図５北海道におけるデントコーン作付面積とヒグマによる被害額の推移（2000-2020）
北海道農政事務所Webサイト（URL:https://www.maff.go.jp/hokkaido/toukei/kikaku/database/tikusan/tikusan.html#esa；2023年4月19日確認）及び北海道ヒグマ管理計画（第2期）（2022）資料編より作成

気柵の設置によって収束した。占冠村では、2022年度から一部のデントコーン圃場周囲に金網のシカ柵を設置した結果、シカによる食害の抑制に効果が見られたが、圃場に出入りするヒグマによってシカ柵の破壊を受けた。このことは、従来よりも明確にヒグマの侵入位置や頻度を把握する手掛かりともなっている。道南の一部地域などで牧草地への再転換事例も見られるが、全道的にデントコーンの作付けは増加しており、それに伴ってヒグマによる被害も増加傾向にある（図５）。

⑤ 堅果の結実状況　道による調査（北海道森林管理局、大学演習林、市町村、自然環境保全団体、道総研、道（総合）振興局職員等が実施）では、渡島半島のブナ、全道のミズナラとも不作である一方、漿果類（ヤマブドウ、サルナシ）は並作。各地区からのミズナラに関する報告では、占冠村を除いて並作であり、道の調査における調査地点の充実が継続課題である。

⑥ 出没対策　▶札幌市：10月に南区の市街地に隣接した豊平川河川敷に若いヒグマが頻繁に出没した際、市役所を中心に警察とハンターが連携協力して対応にあたり、排除すべきという判断の下、銃器で捕獲した。現場ではシカの死体が確認されたため、撤去した。 ▶旭川市：河畔林を利用したヒグマの市街地侵入を防止するため、河川敷を横断する電気柵を設置したが、中央部をくぐり抜けられた。併設した遠隔式カメラで侵入を察知し、最終的には河川経由の市街地侵入を防ぐことができた。柵の突破は防草シートによる絶縁が原因と考えられた。 ▶占冠村：広報や催事、学校教育を通じた普及活動を続けている。今後、ヒグマと人との距離がより近くなり、危険性が増していくことが懸念されるが、当面は人里周辺での予防的捕獲や個体数抑制のための捕獲は実施せず、地道な調査と個別対応を続ける方針である。 ▶知床半島：DNA分析による個体識別が進展し、問題を起こしたヒグマを識別し、その後に捕獲されたかどうかの判定が行えるようになった。そのほか電気柵の普及、植生の刈り払いや問題個体の捕獲等、市街地や農地への出没に対して様々な対策が行われているが、あつれきは減少していない。

⑥ その他　▶札幌市：より具体的なゾーニング管理の考え方を盛り込んだ「さっぽろヒグマ基本計画2023」への改定作業が進められた。▶知床半島：特に留意すべき問題個体が少なくとも2個体存在し、車に接触を繰り返す、ビニールハウス内に侵入して物品を荒らす等の問題行動を繰り返しているが、捕獲に至ってはいない。

鵜野-小野寺 レイナ（慶應義塾大学先端生命科学研究所所員兼鶴岡市鳥獣被害対策推進員）、近藤 麻実（秋田県生活環境部自然保護課）、宇野 壮春（東北野生動物保護管理センター）、山内 貴義（岩手大学）

全体的な傾向として、**初夏や春先の出没は見られたが、秋の出没は目立っておらず**、年間を通じた出没傾向や捕獲数は多くはなかった。ただし、**突発的に市街地や住宅密集地に出没する事例**が見られた。全国の年間の人身事故の半数以上は東北で発生しているが、東北では8月以降の人身事故は非常に少ないことが2022年の特徴である。春先の人身事故は東北の山菜採り文化によるところが大きい。

① 出没

▶青森：2021年度(438件)よりも大幅に少ない（293件）。秋の山が豊作だったことを受けて、コグマが産まれ、個体数が増えたと仮定して2023年度初めに早々に「クマ出没注意報」を発令。▶岩手：出没傾向は例年並み（549件）だが、盛岡駅周辺を含む市街地での出没はあった。▶秋田：初夏の出没はあったが8月より目撃が急激に減少、直近５年間では２番目に出没が少なかった。▶宮城：直近5年のうち最も出没件数が少ない（549件）。▶山形：春先の80cm程度の幼獣（親離れ直後、ないし3歳未満）の出没が多かった。秋の出没は少ない。▶福島：例年並み（385件）だが、市街地出没事例あり。

市街地出没

▶岩手：8月に盛岡駅から近い中心地で日中にクマが出没。川沿いからの盛岡市内への出没があり、直ぐに川に戻った可能性大。その後の通報も複数あったが、警察の調べによると信憑性は低く悪戯を含めた誤情報と思われる。▶宮城：9月6日に陸前落合駅の街路樹にクマが登り、夜間の麻酔銃捕獲を行った。捕獲個体はメスであった。▶福島：4月29日会津若松市の鶴ヶ城公園での出没があり、その後捕獲された。

② 人身事故

▶青森：5月16日登山中に1件。▶岩手：23件24名と非常に多かった。春先は山菜取りの事故が多いが、初夏の農作業や自宅付近でも事故が発生している。以降は里での事故が続いた。岩手県webサイトに情報あり。▶秋田：5～6月に６件発生。内訳は山菜採り中２件、他４件は散歩や農作業など、日常生活での事故。▶宮城：4月17日に里（田周辺）で1件。▶山形：5月の山菜採りでの人身事故2件。▶福島：7件、うち死亡事故1件。7月の登山中の事故1件を除いて、畑作業（7月に1件）や自宅周辺での事故（8月に4件）。

③ 捕獲

環境省の統計（図1）を見ると、H28年より東北での捕獲数の増加が懸念事項である。▶青森：例年並み。▶岩手：特に多いという訳ではない。放獣事例12件。▶秋田：例年より少ない。初夏にピークがあり、9月以降は捕獲は少ない。▶宮城：ここ数年よりも少ないが、錯誤捕獲による捕獲が多い。▶山形：例年並み。▶福島：例年並み。放獣事例12件。

④ 農作物等の被害

各県からは現時点で集計中との回答。大量出没年の2020年では果樹の枝折れなどの大きな被害が報告されたが、2022年は現場からはあまり聞こえてこない。青森では例年リンゴ園に出没しているとの情報があり、果樹やコーン畑など、電気柵の早期普及が期待される。

⑤ 堅果の結実状況

▶青森：ブナは並作だが他の堅果類不作。▶岩手：ブナは並作。他の堅果類は比較的結実。▶秋田：県内5地点中、ブナは4地点で豊作、1地点で凶作、ミズナラは豊作と並作がそれぞれ1地点、残り3地点はナラ枯れ。▶宮城：ブナは並作。他の堅果類も比較的結実。▶山形：調査中とのことだが、現場の感触では並～豊作と思われる。▶福島：ブナは豊作、他の堅果類並作。

⑥ 良い出没対策

▶秋田：電気柵や緩衝帯整備事業、誘引木伐採事業などは継続中だが、出没そのものを抑える特効薬はない。集落にクマが出没した場合を想定した対応訓練を2020年から継続中。▶岩手：県で市街地出没に関する机上訓練を2回行った。来年度は環境省の事業とも併せて実地での訓練予定。▶山形：現場での誘因物の特定と「クマの生態上、移動は止められないが、滞在する原因は人間側で排除できる」「誘因物を除去することでクマの滞在時間を減らし、出会う確率を下げることが対策」との普及活動。▶福島：県では熊鈴の貸し出しを行っている。

⑦ その他

2021年度末がツキノワグマ管理計画の改定年だった県が多い。2020年度の大量出没を経験した翌年であったためか、東北地区内のすべての県がクマの管理を強化する方向へとシフトした。▶秋田：集落内にツキノワグマが出没した場合を想定した対応訓練を実施している。▶山形：イノシシの増加に伴い錯誤捕獲が増えてきて

各県庁のツキノワグマに関するページ

青森県　岩手県　秋田県　宮城県

山形県　福島県

関東地区

丸山哲也（ＪＢＮ会員）

以下の関東地区委員、JBN会員から情報提供をいただいた。茨城県：後藤 優介（茨城県自然博物館）、栃木県：丸山 哲也（ＪＢＮ会員）、群馬県：姉崎 智子（群馬県立自然史博物館）、埼玉県：石田 健、東京都：山﨑 晃司（東京農業大学）、神奈川県：長縄 今日子（丹沢ツキノワグマ研究会）、羽太 博樹（丹沢ツキノワグマ研究会）

① 出没

▶茨城：確実な目撃、痕跡情報なし。▶栃木：目撃情報は88件で、平均的な値であった。▶群馬：市街地での出没がある程度あった。▶埼玉：県HPでは出没件数76件となっているが、今後追加となるかもしれない。2021年度よりは出没報道等が少ない印象だったが、2006年（特別だった）、2014年についで３番目に多い数値となる。スマホの普及で報告される率が上がっているのかもしれない。市町別に公表されている出没件数は、秩父市31件、小鹿野町8件、皆野町5件、飯能市6件の合計50件であり、県の発表より少ないが、県の情報には秩父環境管理事務所が独自に把握した情報が含まれているようである。近年の特徴として、市街地近郊や低地での情報が多い。かつてからあった奥秩父（荒川、大滝）での出没情報が減っており、奥地では人の目の減少や、登山者による目撃は報告されていない場合があると思われる。今後、数多く設置されているセンサーカメラ情報を広く収集、集約するような作業が必要だと提案している。▶東京：人里への出没は減少していない。出没情報は東京都多摩環境事務所、奥多摩町役場などが収集して記録している。▶神奈川：初夏から晩秋にかけていくつかの地域で出没が散発し、養蜂場や養豚場など誘引の強い特定の場所への執着が見られた。※群馬以外では市街地出没は特に目立っていない。

② 人身事故

▶栃木：3件発生。2件は登山中で、1件は郊外の住宅地で散歩中の事故。▶茨城・群馬・埼玉・東京・神奈川：なし。

③ 捕獲

▶茨城：なし。▶栃木：有害捕獲は37頭で、平年並み。このなかには錯誤捕獲も含む。▶群馬：許可捕獲等（2023.3月末現在）は205頭。▶東京：奥多摩町と青梅市で計7頭の有害捕獲が行われた。この中にはくくり罠への錯誤捕獲個体も含まれている。▶神奈川：狩猟は自粛されており、有害捕獲も行われていない。人里に執着した個体を奥山に学習放獣するための捕獲が１件あったほか、錯誤捕獲が４件発生し、このうち２件は奥山に放獣、２件は安全上等の理由から捕殺された。

④ 農作物等の被害

▶茨城：なし。▶栃木・群馬：2022年度分は未公表。▶埼玉：被害はあると思うが、目立ってはいない。▶東京：養蜂被害が報告されている。造林木へのクマ剥ぎ被害は広範囲に発生している。▶神奈川：人里にクマが出没した際、柿、栗、養蜂、家畜飼料等に被害が発生した。

⑤ 堅果の結実状況

▶茨城：未観測。▶栃木：県北地域のミズナラ、コナラの結実は改善したが、高原地域、県南地域のコナラの結実は悪化。特に県南地域はミズナラ、コナラともに不作。▶群馬：全体としては不作。樹種別ではブナ、ミズナラ、コナラが不作、クリは並作、ミズキは大凶作。▶埼玉：石田氏の独自調査（奥秩父、大滝）では、豊作の少なめという印象。クマ棚は少なかった。コナラは不作でイヌブナは凶作。ブナはわずかに成っている個体もみたが、地上に殻斗はなく、不作。糞は多くはみかけず、11月末～12月初めの調査で固くなった古い糞ばかりだったので、早く食べて、早く冬越しに入った可能性がある。2023年2月に秩父市で出没情報があり、冬眠開けも早かった可能性がある（不確定）。▶東京：定量的な計測はないが、ミズナラなどの結実は並作以上であった。▶神奈川：ブナは全体的には豊作と見られたが、一部結実がほとんど見られない個体もあった。ミズナラの結実は全体的に低調だったが、もともと現存量が少なく豊凶判断には留意が必要。また、コナラの結実も一部地域を除いて全体的に低調。

⑥ 良い出没対策

▶群馬：2021年度に改訂された群馬県ツキノワグマ適正管理計画において、河川整備、緩衝帯の設置、藪の刈り払い、ツキノワグマによる樹皮剥ぎ対策として集中的な樹幹巻きを実施といった点が記載された。▶東京：奥多摩町等では電気柵の町民への設置指導を行っているほか、町民向けの獣害対策講座を2回にわたって実施した。▶神奈川：かながわ鳥獣被害対策支援センターの技術支援のもとで、自動撮影カメラによる人里への出没監視、地域ぐるみによる藪の刈払いや放置果樹の除去、柿畑や養蜂場等へ

の侵入を防ぐ電気柵の設置等が行われた。

⑦　その他　▶群馬：環境省のシカ、イノシシ捕獲強化推進にともない、くくりわなによるクマ錯誤捕獲が多く発生しているのが現状。これまでの、餌資源が不足しているから人里近くに出没し、捕獲されるのではなく、山地内で捕獲されている。▶東京：都の事業として，奥多摩町周辺で3頭のツキノワグマにGPS首輪を装着して行動追跡調査が実施された。▶神奈川：2022年度に県のニホンジカとイノシシの管理計画が改定されたが、県が行ったパブコメで、わな捕獲におけるクマ等の錯誤捕獲防止について意見が寄せられ、計画に反映されたとのこと。

北陸地区

白石 俊明（富山県立山カルデラ砂防博物館）
以下の北陸地区委員、JBN会員の方に、情報収集にご協力をいただいた。 新潟県：清水あゆみさん（(株)うぃるこ）、石川県：有本 勲さん（山立会）

①　出没　出没件数は昨年度と同水準で少なかった（過去10年平均を下回る）。しかし、４県とも秋に限らず「市街地にある程度出没」する事象が、北陸では「普通」となっている点は看過できない。いわゆる大量出没は発生しなかったが、後述するように山林から離れた人家で人身事故が発生している。▶新潟：丘陵や河川沿いの平地で侵入事例が5～6月に頻発。▶富山：丘陵沿いの出没が主だが、 6月等は平地侵入もあり。▶石川：海沿いの平地や丘陵末端での出没が生じた。一例を挙げると、ショッピングモールにクマが侵入し全国ニュース（2021年10月）となったJR加賀温泉駅近くで10月に目撃あり。▶福井：5月に丘陵末端での出没が多く、平地への侵入あり。

②　人身事故　新潟1件、富山2件、石川・福井0件であった（過去10年平均は４県合計で19.3人）。▶新潟：6月11日に登山者（50代男性）が正午頃に襲われ左頬を負傷し重症。▶富山：6、10月にいずれも人家・田畑周辺で発生した。▶6月20日午前4:55、70代男性が自宅周辺を清掃中に、クマと遭遇し両肘を引っ掻かれ軽傷。丘陵から2.5km離れた田園地帯。4時間後に事故現場から約1km離れた

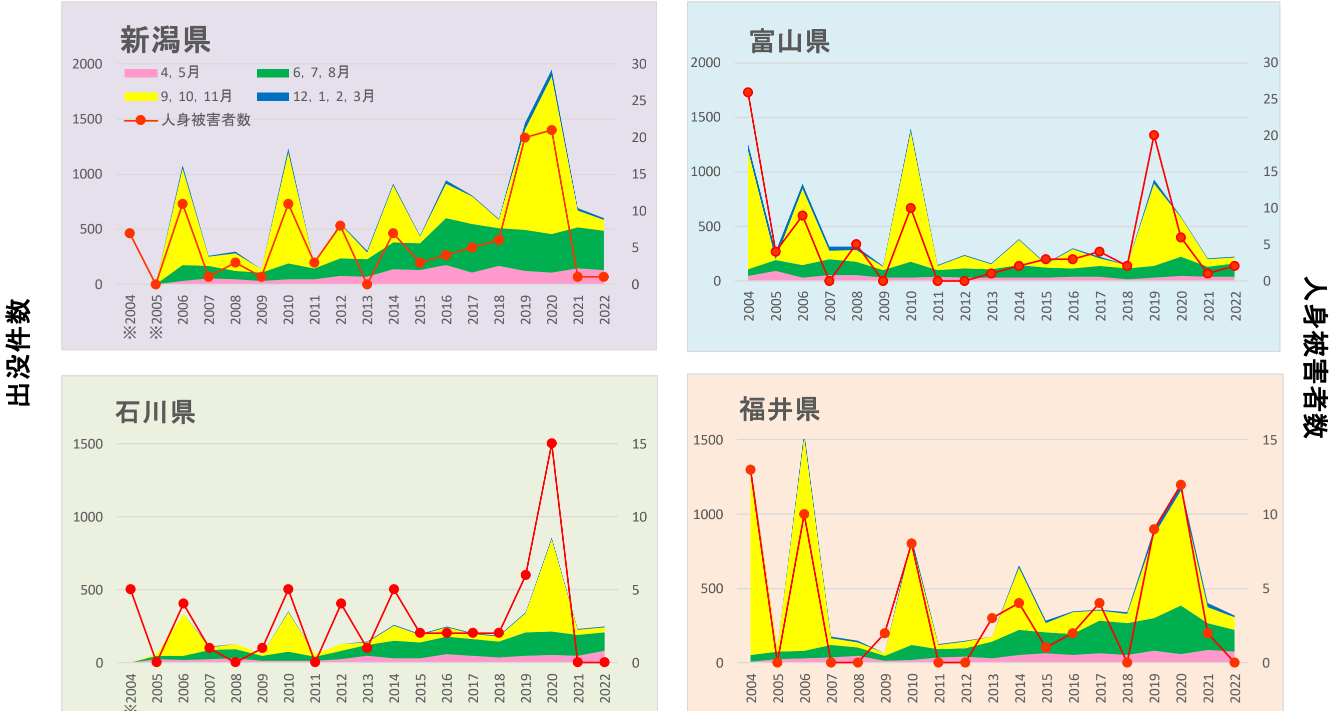


図６　北陸４県の出没件数（季節別）と年間の人身被害者数

- 石川県の出没件数は目撃件数のみで痕跡情報を含まない。「※印」は出没件数データがない年。

場所で捕獲。▶10月20日午前2:20、30代男性が新聞配達中にクマと遭遇し右脚を噛まれた軽傷。丘陵から約0.5km離れた水田地帯。前日深夜にも近隣の民家で目撃あり。5時間後に隣の民家敷地内で捕獲・体長1.3m成獣。

③ 捕獲　4県とも許可捕獲頭数は平年（過去10年平均）よりやや少なかった（表1）。放獣数の多い福井県（過去10年平均は14.2頭）では捕獲数が減る傾向を心配する声がある。

④ 農作物等の被害　今回、情報収集を行っていない。

⑤ 堅果の結実状況　▶石川：ブナが不作だがミズナラは大豊作、ほか３県も概ね結実は良好で、不作～並作が主だった。▶富山：県東部の一部でマイマイガが大量発生し、ブナの葉が全消失し地面に未熟果が大量に落下する事象が起きた。

⑥ 出没対策　富山、石川では自動撮影カメラとAI（人工知能）による獣種判別を活用したシステムで、クマ出没をリアルタイムで監視する取組みが始まっている（カメラ台数はまだ少ないものの、富山では2市・14台、石川では県と市あわせ４自治体で75台が稼働。2023年度には富山・福井など6自治体で約30台を導入予定）。

⑦ その他　地球環境基金の助成を受け、2020年度からJBNで実施したアーバンベアプロジェクトの一環として、2022年10月15日に北陸最大級のショッピングセンターで買い物客を対象にした「市街地に出るクマについて知るレクチャー」を実施した。北陸版のクマに関する普及啓発教材を集めたトランクキットや大型の出没地点マップなどを活用しながらレクチャーを行った。レクチャー実施後にアンケートをとると95.5％の人がクマ出没が自分にも関係が「ある」と回答するなど、今後の継続した普及啓発につながる、手ごたえのあるイベントとなった。詳細は、アーバンベアプログラムの報告書も参照いただきたい。

QRコード
地球環境基金プロジェクト
「街に出るクマ ～アーバンベアとどう付き合うか～」報告書

表１　北陸4県の堅果結実・出没・事故の概況（2022年）

県		新潟	富山	石川 ※2	福井
堅果結実 ※1	ブナ	○	△	×	△
	（前年・　2021年）	×～△	○	◎◎	○
	（前々年・2020年）	×～△	×	××	×
	ミズナラ	○	△	◎◎	○
	（前年・　2021年）	×～△	△	◎	△
	（前々年・2020年）	△～○	△	○	△
	コナラ	○	○	○	○
	（前年・　2021年）	△～○	△	○	△
	（前々年・2020年）	×～△	×～△	×	△
出没 ※2	1-12月の件数	596 件	221件	244 件	314件
	（2012-2021平均）	（867件）	（333件）	（279件）	（478件）
	9-11月の件数・%	100件・17%	59件・27%	32件・13%	85件・27%
	（2012-2021平均）	（408件・38%）	（189件・45%）	（115件・30%）	（227件・37%）
事故	件数・人数	1件・1名	2件・2名	0件・0名	0件・0名
	（2012-2021平均）	（6.6件・7.5名）	（3.3件・4.2名）	（3.4件・3.9名）	（3.6件・3.7名）
捕獲 ※3	頭数（4月-翌3月）	139頭	60頭	41頭	80頭
	（2012-2021平均）	（254頭）	（78頭）	（61頭）	（105頭）

※1　堅果結実　凡例：◎豊作、○並作、△不作、×凶作、
石川県は「◎大豊作、××大凶作」の指標を用いる.

※2　石川県は目撃のみで痕跡等を含まない.

※3　年度計の許可捕獲数

中部地区

玉谷 宏夫（ピッキオ）
中部地区委員の、朝倉 美波・岸元 良輔（信州ツキノワグマ研究会）、橋本 操（岐阜大学）、竹内 翔（静岡県）、玉谷（ピッキオ）が各県の担当部署への聞き取りなどによって情報を収集した。

一部の地域で市街地への出没や人身事故があり、錯誤捕獲の件数は高止まりしているものの、出没数や捕獲数を見ると、**ここ数年の中では平穏な一年だったと言える**。

①　出没　▶岐阜：市街地での出没は特に目立っていない。例年と同じく、飛騨地域、東濃地域での出没は一定数あったが、著しい増加や新たな場所への出没等はみられなかった。ただし、飛騨地域では6月に目撃件数がピークを迎えた後、8月に再度増加した点が2021年とは異なっていた。出没した場所別にみると、最も目撃が多かったのは道路で、次いで住宅地、山林・林道・林地、農地だった。これは例年と同様の傾向であった。▶静岡：市街地での出没は特に目立っていない。静岡県のツキノワグマは「富士地域個体群」と「南アルプス地域個体群」に二分される。2021年は5月に富士地域で目撃情報が多かったのに対して、2022年は年間を通じて両地域で少なかった。▶愛知：市街地での出没は特に目立っていない。▶長野：市街地での出没は特に目立っていない。里地での目撃件数は大量出没年（2006、2010、2014年）を除いた年の平均値と同等であり、8月にピークを迎えるという傾向も同じだった。ただし、地域によっては例外もあり、上田市の住宅地では10月にクマの目撃が相次いだ。この一連の目撃情報に関与していたのは特定のメスグマであり、カキなどの果実に誘引されたものだった。

②　人身事故　いずれの県も市街地での事故は特に目立っていない。▶岐阜：8月に1件の人身事故が発生したが、市街地での事故ではなかった。▶静岡：静岡市中部地区の山奥でシカのわなにかかった子グマに近づいたところ、親グマにひっかかれて負傷（1件）。▶愛知：なし。▶長野：4月から3月までの間に8件（8人）の事故が発生した。前年度の16件（16人）より減少した。2件は里地での事故であり、隣家に回覧板を持参した時（南箕輪村）および山際の道をウォーキングしていた時（御代田町）にクマと鉢合わせしたものだった。大部分（7件）の事故は8～19時の間に発生した。

③　捕獲　▶岐阜：58頭が捕獲され、2021年度の30頭から増加した。各地域の捕獲頭数をみると、目撃が最も多い飛騨地域で43頭、次いで東濃地域9頭、岐阜地域4頭、中濃地域2頭だった。捕獲頭数は目撃件数の推移と連動するように6月に増加し、その後減少してから8月に再度増加した。最も捕獲頭数が多かったのは8月だった。▶静岡：南アルプス地域では林業被害防止のために31頭が許可捕獲され、富士地域ではシカ用のくくりわなで4頭が錯誤捕獲された。錯誤捕獲されたクマは麻酔をかけて放獣した。▶愛知：なし。▶長野：捕殺数は個体数調整によるものが145頭、緊急捕獲が30頭の計175頭（速報値）で、一昨年度の316頭、昨年度の266頭と比較して91頭減少した。36頭を学習放獣した。錯誤捕獲（放獣）は295件発生し、一昨年度の362頭、昨年度の306頭に続いて高止まりしている。2021年度には狩猟で34頭が捕獲された。長野県では狩猟が始まる11月15日を個体数管理の起点にしており、個体数調整による狩猟への影響は基本的にない。

④　農作物等の被害　▶岐阜：飛騨地域で果樹被害が報告されたものの、2021年度まで被害状況の資料提供がなかったため、増減の傾向はわからない。▶静岡：ミツバチの巣箱への被害が県中西部地域で1件発生した。▶愛知：養蜂箱　（個人のものか養蜂家のものかは不明）が被害を受けた。▶長野：農業被害は減少傾向にある一方で、クマ剥ぎによる林業被害は2015年以降、やや増加傾向にある。2021年度のクマによる農林業被害額は、全鳥獣被害額の19.7%に相当する約1億4400万円だった。

⑤　堅果の結実状況　▶岐阜：豊凶予測調査を実施して、県全体ではブナが凶作（凶作～並作までばらつきあり）、ミズナラが凶作（凶作～並作までばらつきあり）、コナラが凶作（大凶作～並作までばらつきあり）と評価した。とりわけ東濃地域は東部でコナラが大凶作、ミズナラが凶作、飛騨地域は北部でコナラ・ミズナラが凶作だった。しかし、県全体で堅果類が凶作であった

にも関わらず、晩夏から秋のクマの目撃件数や被害件数は多くなかった。ブナ、ミズナラ、コナラ以外のものを食べていた可能性が考えられる。▶静岡：ブナ科樹木の豊凶調査は行われていない。県内全域でコナラを中心とするナラ枯れ被害が広がっており、クマの行動への影響が心配される。▶愛知：県内平均としては並作。ただしミズナラは一部地域で大豊作〜凶作で、ばらつきがあった。▶長野：ブナ：大凶作〜豊作、ミズナラ・コナラ：大凶作〜大豊作、クリ・クヌギ等：大凶作〜大豊作で、ばらつきが大きいものの、県内全体では一定程度の結実量が見込まれた。北信ではブナの着果状況が良好であり、東信の上田地域ではクリ、クルミが大豊作となった。全県的なクマの大量出没の可能性は低いが、堅果類の少ない地域ではクマの行動範囲は広がる可能性があること、越冬中のクマの出産が一定程度見込まれることなどをホームページで発信した。

⑥ 出没対策の事例　▶静岡：集落周辺の放置果樹の回収。田畑や果樹園、養鱒場の周囲を電気柵で囲う。▶愛知：豊田市でセンサーカメラ等による調査を実施中。▶長野：〇春期捕獲（許可捕獲）：銃器で捕獲するため追い払い効果が期待でき、里地でのわな捕獲と比べて被害を抑制する効果が期待できる。また、伝統的な猟法の存続や狩猟技術の維持にもつながる。このため、専門家を含む保護管理協議等を経た計画に沿って捕獲の実施および評価ができる地域においては春期捕獲を認めている。〇地域区分（ゾーニング）：伊那市、山形村、朝日村、小谷村で地域区分導入の検討を進めている。〇現場対応：県がNPO等に設置を委託している「クマ対策員」が、市街地への出没や人身事故発生時の現場検証、住民への普及啓発、錯誤捕獲対応などを実施している。〇捕獲上限数：昨年度の5期計画から、推定個体数の増加に伴い捕獲上限数をこれまでの約2倍の337頭（大量出没時は675頭）に引き上げた。今後、この上限数が現場でどのように運用されていくのか注視していく。

⑦ その他　▶岐阜：クマの錯誤捕獲が起きないように、イノシシ用の箱わなについては上部に穴が開いたものを使用している。県の担当部署には、クマが餌付いてトラップハッピー状態になるのではないか、危なくはないか、という問い合わせが届いている。他の地域では、錯誤捕獲に対してどのような対策をしているのか情報がほしい。また、今のところ市街地でのクマの出没は目立っていないが、今後の出没に対する備えが課題である。他の地域の体制を参考にしたい。▶静岡：同じ個体を何度もくくりわなで錯誤捕獲するケースが増えている。クマの行動特性に着目した対策についても検討が必要になってくるのではないか。

近畿地区

中川 恒祐 （（株）野生動物保護管理事務所）
近畿地方の2022年度のクマの状況を、**北部地域（兵庫県、京都府、滋賀県、大阪府）**と**南部地域（奈良県、和歌山県、三重県）**に分けて報告する。

① 出没　全体として市街地での出没は、特に目立っていない。▶北部：出没の少ない大阪府を除く各府県の月毎の出没状況を、環境省発表の速報値をもとにグラフにまとめた（各府県12月まで、図7）。滋賀県では例年と比べて春の出没が少なく、通年での出没数も多くはなかった。京都府では例年と比べて春から夏の出没が少なく、秋の出没が増加した。兵庫県は春の出没が過去2年間と同程度あったのに対して、秋の出没が増加した。大阪府では7件の出没があった。▶南部：環境省発表の速報値によると、3月末の時点で奈良県は70件、和歌山県は57件、三重県は19件の出没が発生している。奈良県は2009年以来もっとも多い出没となり、和歌山県も昨年に続き出没が多かった。三重県は例年よりやや出没は少なかった。なお、近畿南部のクマ（紀伊半島地域個体群）は環境省の定める「絶滅のおそれのある地域個体群」に指定されていることからも、全体としては多くの出没はないが、和歌山県、奈良県はやや増加の兆しがある（図2も参照）。

② 人身事故　市街地での事故は特に目立たなかった。▶北部：京都府で2件の人身事故が発生した。幸い死者は出ていない。京都府の事故はどちらも集落内の自宅近くで発生した。▶南部：2022年度の発生なし。

③ 捕獲 ▶北部：兵庫県、京都府では2017年度からゾーニング管理が実施されており、集落周辺での有害捕獲が増加している。両府県の捕殺数は兵庫県で37頭、京都府で114頭となっており、兵庫県では過年度に比べて捕殺数は減少した。京都府では出没の多かった2019年度を除くと過年度と同程度の捕殺数になった。また、滋賀県では1頭、大阪府では捕殺はなかった。兵庫県と京都府で狩猟が解禁されている。滋賀県では例年通り狩猟は自粛となっている。▶南部：2022年度は捕殺は実施されなかった（環境省発表）。

④ 農作物等の被害 ▶北部：京都府、滋賀県では人工林への剝皮被害（クマハギ）が毎年一定程度発生している。クマハギへの対策として、テープ巻き防除が実施されている。兵庫県、京都府では例年同様に農作物被害としてカキ、ナシなどの果樹への被害が多く発生した。▶南部：紀伊半島では一般的な農作物被害はほとんど発生せず、集落周辺や山中に置かれた蜜胴の被害がある。

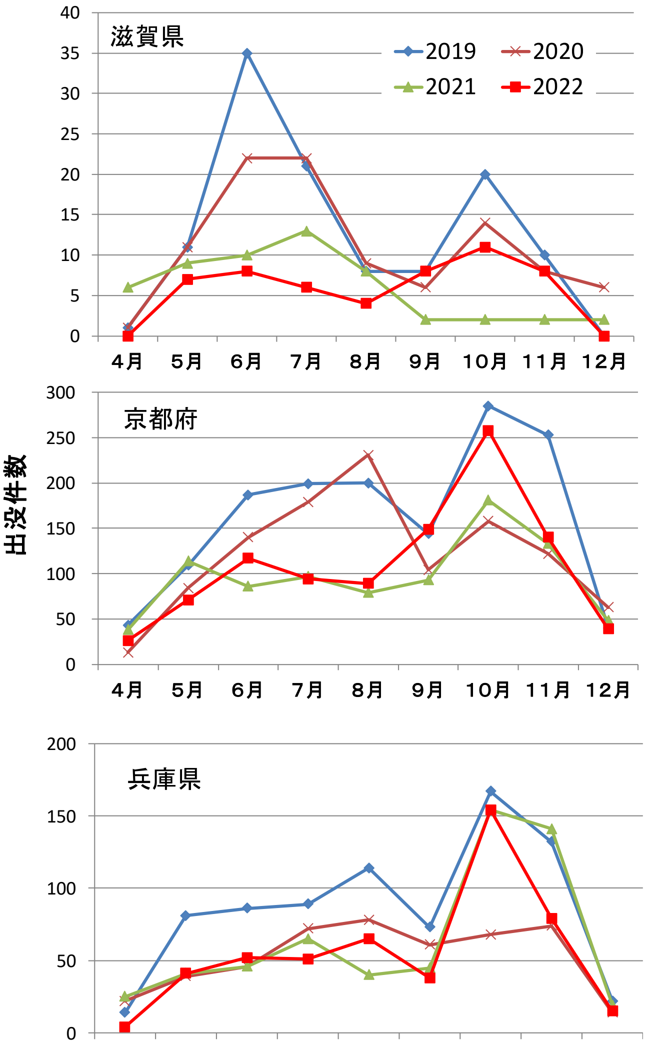


図７ 近畿北部の月別出没情報数

⑤ 堅果の結実状況 ▶北部：兵庫県、京都府、滋賀県では豊凶調査が実施されている。兵庫県ではブナが大凶作、コナラ、ミズナラが並上で3種全体では並上であった。京都府ではコナラが並作、ミズナラ、ブナが凶作であった。滋賀県ではミズナラ、コナラが不作、ブナが凶作であった（**表２**）。

⑥ 出没対策 ▶北部：クマを誘引する集落内の不要なカキやクリの木の伐採を行政として推奨している。また、集落周りの動物が隠れられる薮などを刈り払い、バッファーゾーンを設置している。また、果樹等の被害防止のため、電気柵等の対策が行われている。兵庫県は轟音玉等によりクマの追払いを実施することもある。兵庫県では、民間企業に委託した鳥獣対策サポーター事業を実施しており、市町村からの委託により獣種に限らない総合対策（実態把握、点検、指導など）を行っている。

⑦ その他

近畿地区では2022年9月にアーバンベアプロジェクトの一環として、「クマにかかわる普及啓発を実践する人材育成ワークショップ in 関西地区」を大阪市で開催した。ワークショップには9名の方が参加し、市民目線でクマの普及啓発をどのように行えばいいか活発な議論が行われた。近畿地方では1990年代から錯誤捕獲や出没に対する対応体制が構築されており、現在もよく機能している。

表２ 近畿北部の堅果類の結実状況

		2017	2018	2019	2020	2021	2022
兵庫県	ミズナラ	豊作	並上	凶作	並下	凶作	並上
	コナラ	豊作	並下	並下	凶作	並下	並上
	ブナ	並上	凶作	大凶作	大凶作	豊作	大凶作
京都府	ミズナラ	並作	並作	凶作	並作	並作	凶作
	コナラ	並作	並作	凶作	凶作	並作	並作
	ブナ	並作	凶作	凶作	凶作	豊作	凶作
滋賀県	ミズナラ	並作	不作	凶作	並作	不作	不作
	コナラ	不作	不作	不作	不作	不作	不作
	ブナ	凶作	不作	凶作	凶作	不作	凶作

中国地区

澤田 誠吾・石橋 悠樹（島根県）

① 出没

市街地での出没は特に目立っていない。市街地での出没はなかったが、中山間地域の集落内において、誘引物等がなくうろつく個体が島根県や山口県であった。また、島根県では、民家の納屋にクマが籠城した事例も発生した。

② 人身事故

市街地での事故は特に目立っていない。全体では、島根県2件、広島県0件、山口県１件、鳥取県0件、岡山県0件。▶島根での1事例の概要：2022/10/10 23:00頃、80歳代男性、夜間に家の外に設置されているトイレに向かったところ、背後からクマらしき動物に突き飛ばされた。左腰から脇腹にかけて4か所を引っ掻かれたが軽傷であった。市防災無線による注意喚起、周辺のパトロール、現場検証を実施。

③ 捕獲

2022年度の捕獲数は、島根県99頭、広島県は38頭、山口県は30頭、鳥取県41頭、岡山県24頭だった（図8）。また、島根県では、集落周辺で自然死個体と瀕死の個体が5頭発見された。これまで、大量出没年に自然死個体が発見された事例はあったが、単年度で5頭も発見されたのは初めてだった。個体分析の結果や発見状況などから、「なぜ？5頭も発見されたのか」についてミーティングができればと考えている。

④ 農作物等の被害

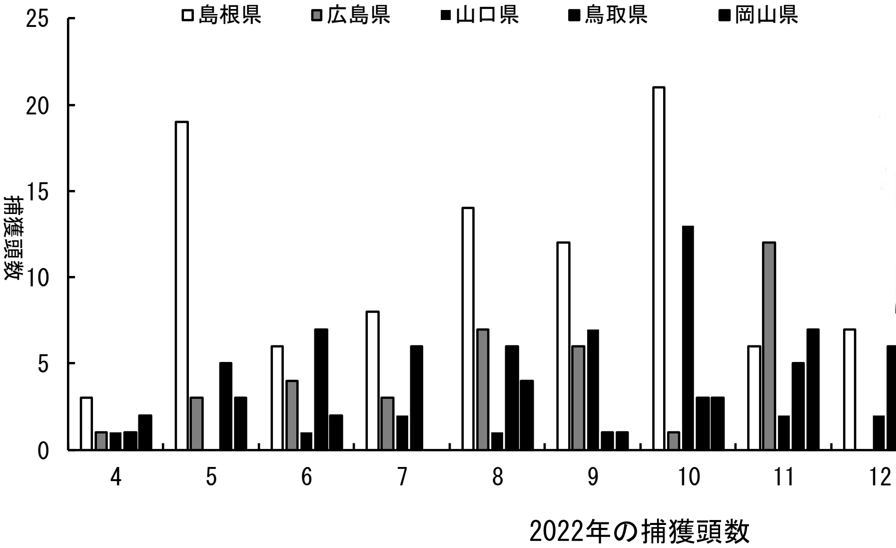
島根県では養蜂蜜胴への被害、ビワ、カキへの被害が発生した。山口県では養蜂とリンゴの被害があったが、その他の県での被害はなかった。

⑤ 堅果の結実状況

▶西中国地域（島根・山口・広島）での目視調査より。ブナ県東部豊作、県西部凶作、ミズナラ凶作、コナラ豊作、クリ並作、クマノミズキ豊作。▶鳥取：ブナ並作上、ミズナラ豊作、コナラ並作上、クリ並作下。▶岡山：ブナ並作、ミズナラ並作、コナラ並作。

⑥ 出没対策

▶島根県において有害鳥獣誘引果樹等除去事業を実施した。これまで人が管理、利用していた集落内の果樹園や庭先の樹が、高齢化や空き家の増加等により管理収穫されずに放置される事例が増加している。果樹の栽培種は、山の餌よりも甘さや栄養に優れ、クマが放置果樹の存在を認知すると繰り返し出没、加害する要因となっている。被害を防ぐためには管理放棄された果樹の適正な管理が必要である。これまでにも集落ぐるみでの誘引物対策の実施を推奨してきたが、経費がかかること、中山間地域等では人口減少や高齢化で実施体制づくりが進まないこと、誘引物対策の必要性や誘引物除去の効果について、関係者や住民の理解が不足していること等から取り組みが進んでいなかった。そこで、モデル地区を定めて、管理放棄された果樹等の伐採を実施し、クマ等の出没抑制効果を実証すると共に成果を市町へフィードバックし、誘引果樹除去の取組拡大を図っている。



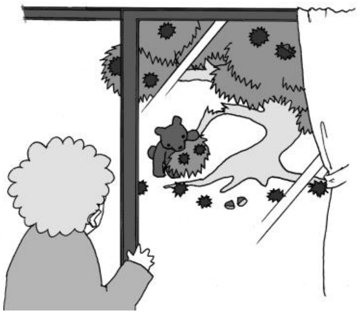


図８　中国地区の2022年度の月別捕獲数

四国地区

山田 孝樹
(四国自然史科学研究センター)

① 出没　山間部（クマの生息地域内、集落等は付近にない）の林道や町道において、同一個体と考えられるクマの目撃情報が6月から8月にかけて複数寄せられた。目撃状況は道路を車で走行中に、道路横の林内にいるクマを目撃する事例が多かった。人間に対して警戒心が薄く、目撃時にクマが逃げずに行動する様子が複数回報告された。9月以降は目撃情報が無くなった。徳島新聞のYouTubeチャンネルで目撃時の動画が公開されている（QRコード①）。

② 人身被害　③ 捕獲　④ 農作物等への被害
いずれも、特に情報なし。

⑤ 堅果の結実状況　ブナとミズナラの豊凶を目視調査により把握している。ブナは豊作、ミズナラについては並作～豊作であった。

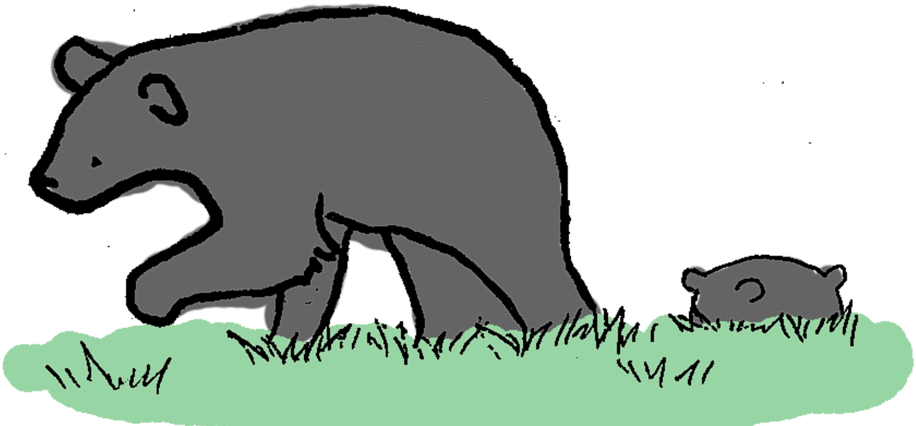
⑥ 出没対策　左記で報告した目撃情報については、徳島県が注意喚起のチラシを目撃地点や周辺の観光施設などに配布した。また後述の地球環境基金プロジェクトの一環で、養蜂被害防除活動として電気柵の設置を一部実施している。

⑦ その他

- JBNで2017年度から3年間実施した四国プロジェクト（地球環境基金）を継続する形で、四国自然史科学研究センターによって地球環境基金助成による「四国のツキノワグマ保護プロジェクト」（2022年度は3年間の3年目）を実施した。このプロジェクトでは引き続き、JBN及び日本自然保護協会と連携・協働して活動を実施している。詳細はプロジェクトのHPを参照（QRコード②）。
- 上記プロジェクトによって、四国のクマの生息地内にある徳島県那賀町木頭において「木頭くま祭り」を開催した。公開シンポジウムなどの当日の様子は四国自然史科学研究センターのYouTubeチャンネルで公開している（QRコード③）。

QRコード① 徳島新聞のYouTubeチャンネル

QRコード② Save the Island Bear「四国のツキノワグマ保護プロジェクト」HP

QRコード③ 保全と地域の暮らしの両立を目指して～木頭から始まるツキノワグマ保全のカタチ～

なお、九州地区からは「情報なし」とのことでした。